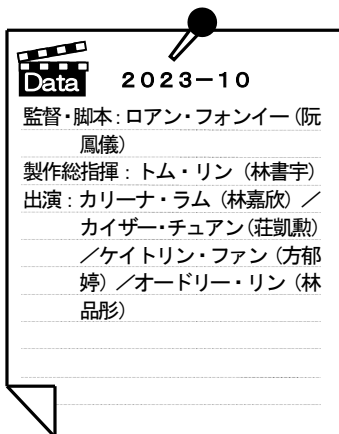




👁️👁️ みどころ

壮大な「歴史モノ」やハラハラドキドキの「スパイもの」も面白いが、自伝的な「家族モノ」もグッド！近時の邦画はくだらない「恋愛モノ」や「青春モノ」が多いが、中国では『こんにちは、私のお母さん』（21年）、『シスター夏のわかれ道』（21年）、『柳川』（21年）等の、泣かせる「家族モノ」の名作が多い。

本作もその一つだが、舞台が台湾であること、時代が広東省、香港、台湾を中心に猛威を振るったSARSの時代（＝2003年）であることに注目！

今から60年前の私の中学校時代も孤独感との闘いだったが、今から20年前にアメリカから来た少女（美國女孩）である監督は、いかなる家族生活を？80%は自伝的な“小さな物語”から、あなたは何を受け止め、何を学ぶ？

■□■初長編で賞を総ナメ！ロアン・フォンイー監督に注目！■□■

近時、中国（本土）でも若手監督の進出が著しいが、それは台湾でも同じ。『シネマ49』では、①『親愛なる君へ（親愛的房客／Dear Tenant）』（20年）（278頁）、②『恋の病～潔癖なふたりのビフォーアフター～（怪胎／i WEiRDO）』（20年）（284頁）、③『1秒先の彼女（消失的情人節／My Missing Valentine）』（20年）（287頁）、④『返校 言葉が消えた日（返校）』（19年）（293頁）、を紹介したが、新たに、ロアン・フォンイー監督も登場。1990年に台湾で生まれた阮鳳儀（ロアン・フォンイー）。彼女は長編初監督作品となる本作で、第58回金馬奨を10部門にノミネートされ、最優秀新人監督賞、最優秀撮影賞、最優秀俳優賞、国際批評家連盟賞や観客賞の5部門で受賞したからすごい。

私が日曜日の夜にベッドでよく聴いているのが、NHKのEテレで午後9時から放映さ

れている『クラシック音楽館』。1月22日（日）のN響第1970回定期公演では、台湾のバイオリニスト、レイ・チェンによる「メンデルスゾーン〜バイオリン協奏曲」の演奏を聴いたが、これもすごかった。対中国の関係で厳しい状況が続く台湾は、民進党 VS 国民党の二大政党制の下での国家運営を続けているが、それが困難を極めていることは言うまでもない。しかし、そんな中、音楽界でも映画界でも次々と若い才能が輩出していることにビックリ！

■80%は自伝的な物語！舞台は2003年！SARSは？■

ロアン・フォンイー監督は、1990年に台湾で生まれたが、97年に母と1歳下の妹と共にアメリカのオレゴン州に移住し、2003年に再び台湾に戻ったという経歴の持ち主。本作の製作総指揮を務めたのは、トム・リン（林書宇）。本作の主人公となる13歳の少女ファンイーを演じたケイトリン・ファン（方郁婷）は、オーディションで選ばれた新人だが、乳癌の告知を受けてアメリカから台湾に戻る決心をした母親リリー役は、カリナ・ラム（林嘉欣）というビッグネームが演じている。『おねえちゃん JieJie』（17年）という彼女の最初の短編映画が注目されたとはいえ、海のものとも山のものともわからないロアン・フォンイー監督が書いた本作脚本に、トム・リンが注目し、その映画化を勧めたのは、一体なぜ？また、トム・リンから送られてきた脚本を3日間かけて読んだというカリナ・ラムが即座に出演を決めたのは、一体なぜ？本作については、1,300円もする詳しいパンフレットがあるし、『キネマ旬報』2022年10月下旬号でも、44頁〜53頁まで特集しているので、それらは必読！

80%は自伝的な物語という本作の時代は2003年。そして、本作には台湾を襲った「SARS」の物語が登場するが、本作の撮影開始は、新型コロナがパンデミック化する直前だったらしい。ロアン・フォンイー監督自身は、2003年にアメリカから台湾にやってきた時に台湾を襲ったSARSを体験しているが、ファンイー役を演じたケイトリン・ファンはそれを知らない。したがって撮影中にコロナの恐ろしさを知ったことは、本作の撮影に大いに役立ったかも・・・。

■この母娘はなぜアメリカへ？なぜ再び台湾へ？■

本作は2003年の冬、13歳のファンイーが8歳の妹ファンアン（オードリー・リン（林品彤））と共に母親のリリーに連れられて台湾の空港に到着するところから始まる。父親のフェイ（カイザー・チュアン（莊凱勳））が迎えにきてくれたのは当然だが、帰路の車中でたちまちファンイーの台湾帰国への不満が噴出してくるので、それに注目！その不満は家に着いてからも同じだ。これから通う台北の中学校に対する不満がいっぱいなら、父親が作ってくれた食事にも、狭くて汚いアパートにも不満だらけらしい。妹のファンアンはまだ幼いから父親との再会を単純に喜んでいたが、13歳の思春期（反抗期？）ともなると・・・？

リリーの帰国は乳癌を宣告されたためらしいが、そもそもなぜ父親一人を台北に残して

母親と2人の娘だけがアメリカに渡ったの？生活費はどうしていたの？それは、自分の体験記を映画化したロアン・フォンイー監督が一番よく知っていることだが、それを説明するのが本作の目的ではないから、ほとんど説明してくれない。そればかりか、台湾と中国大陸とを往来する仕事に従事しているらしいフェイは職場に大きな個室を持っているから、それなりの地位と収入がありそうだが、そんな経済的な事情もほとんど説明してくれない。逆に、自分の視線から、母親や父親に対する不平不満ばかりを述べているファンイーの姿ばかりがやけに目立っている。その点から見ても、なるほど本作はその80%がロアン・フォンイー監督自身の自伝映画！？

リリーの癌のレベルがどれくらいかはよくわからないが、抗癌剤を飲んでいるためか、食後の片付け中に急に吐き気を催す姿を見ていると、かなり末期？？もっとも、癌闘病映画に必ず登場する、毛髪が大量に抜け、頭に帽子を被るシーンは本作には登場しないから、末期ではないのかも・・・？それはともかく、そんなふうには本作はあくまで13歳の少女ファンイーの視線から描かれる家族の物語だということをしっかり確認したい。そのため、本作の原題は『美國女孩』、邦題も『アメリカから来た少女』なのだ。

■□■4 人家族の気持ちはバラバラ！状況はまさに最悪！■□■

ファンイーたちが暮らしていたロサンゼルスの家がどの程度のものであったのかは知らないが、台北のアパートの狭さと汚さを嘆いている母親の姿を見ると、男の1人暮らしだった点を割り引いても、そこがアメリカの家よりかなり劣っていることは間違いない。

また、もともと、クラスメイトと離れたくないため台湾への帰国に猛反対していたファンイーの台北の中学校生活は地獄だった。だって、何事も自由だったロサンゼルスに比べて、そこでは、決められた髪型や制服が厳しい上、苦手な中国語での授業や先生の体罰など、アメリカの学校生活とは異質で、大変なことばかりだったのだから。その上、幼馴染のティン以外のクラスメイトからは“アメリカ人”と呼ばれ、疎外感を味わされた上、成績も下降の一方だ。さらに、家に帰ると、家族と久々に一つ屋根で過ごすことになった父は、妻を心配し、娘たちを気遣いながらも、生活のために出張で家を空けざるを得ない。そのため、母に対してやり場のない怒りを募らせるファンイーは、反抗的な態度を取り続けることに。そんな娘に母も感情的になり、母子の溝はどんどん広がっていくばかりだった。今まさに、4人家族の気持ちはバラバラで、状況はまさに最悪だ。

なぜ私の生活はこんなことに？ファンイーは毎日そう思いながら日々を過ごしていたが・・・。

■□■孤独感をブログに！和解のきっかけは作文コンクール■□■

両親と1歳違いの兄との4人家族だった私は、中高一貫の進学校で6年間を過ごしたが、その当時の孤独感には本作に見るファンイーと同じ。その孤独感を、私は映画や囲碁、将棋で何とか紛らしながら、ギリギリ受験勉強にも耐えて、大阪大学に進学することができたのはラッキーという他ない。

本作のファンイーが馬や乗馬が大好きだったというのは意外だが、それはいかにも『アメリカから来た少女』という本作のタイトルにピッタリ。ファンイーが父にも母にも反抗的になり、さらには、ついつい妹にも当たってしまうのは、お年頃なこともあって仕方ないだろう。そんなファンイーがインターネットカフェに出入りする中で、台湾の乗馬クラブにたどり着いたのはさすがだが、校則ではそれも禁止らしい。そのため、さらなる罰則を受けたが、インターネットを活用する中で、ファンイーが母親への不満をブログに書いて紛らわしていたところ、それがある教師の目に留まり、スピーチコンテストに出ることを勧められたからラッキー。私は中華人民共和国駐大阪総領事館主催の「私の好きな中国映画」作文コンクールに応募して、見事三等賞に入賞したが、さてファンイーが書いたスピーチコンテストに向けての原稿は？それが単に母親への不平不満をぶつけただけのものなら評価されるはずはないが、不平不満の裏に13歳の娘として母への限りない愛がこもっていることが理解されれば・・・？さらにその原稿をもとにしたファンイーのスピーチに力と愛情がこもっていれば・・・。

■□■SARS襲来！妹は風邪？ひょっとしてSARS？■□■

全世界を一気にパンデミック化した新型コロナウイルスは、3年間の猛威を経て2023年2月の今、一定の落ち着きを見せている。他方、私が自社ビルを持ち、ホームページや映画評論を始めたのは2001年。郵政民営化と不良債権処理を唱えた小泉純一郎内閣の発足も2001年だが、考えてみれば、その直後にアジアで猛威を振るったのがSARSだった。日本では比較的影響は小さかったが、SARSの発生源は2002年1月に中国の広東省で発生した原因不明の肺炎だった。SARSの猛威は、2003年3月12日のWHOによる全世界への“警告”から7月5日の制圧まで約1年4カ月と、新型コロナウイルスに比べると短かったが、広東省、香港、台湾を中心に広がったから、アメリカから台北に戻ってきたファンイーたちにとっては迷惑な話だ。そのうえ、父親の出張直前、ファンイーのスピーチコンテスト直前に、妹のファンアンが風邪？ひょっとしてSARS？という症状を見せたから、さあ大変。父親は出張を中止してファンアンを入院させたが、隔離されてしまったから、さらに大変だ。診察の結果は？

本作のパンフレットは1300円と高いが、ストーリーの紹介はもとより、6本のレビュー、1本のコラム、5本のインタビューが収録されているから充実度は高い。その中の1つ、川本三郎氏（作家・評論家）のレビューには「ラスト、ファンイーがアパートの窓から下を見て、妹が帰ってくるのを迎えるところで終わる。あえて妹の姿を見せず、“感動的”になるのを抑えているのが好ましい。」と書かれているが、まさにその通り。せっかくファンイーとファンアンが母親とともにアメリカから台北で仕事をしている父親の元に戻ってきても、ケンカばかりが続き、家族はバラバラ。お年頃のファンイーは疎外感、孤独感、絶望感でいっぱいになっていた。ファンイーには最悪の場合、家出や自殺まで考えられる（？）状況下、SARSの疑いでファンアンが入院、強制隔離されたことは下手すると、

この家族の致命傷になりかねないものだった。しかし、現実は何？また、ファンアンを入院させた後の父親の仕事は？さらにファンイーのスピーチコンテストの結果は？そして何よりも、ファンアンのSARSの疑いは陽性？それとも陰性？

新型コロナウイルスの猛威に対する全面隔離政策から大胆な切り替えを行った結果、現在の中国では「阳了吗？」の挨拶が日常となり、14億の人口のうち11億人が陽性になったとのことだが、さてファンアンのSARSの疑いは如何に？そして、本作のラストはどんなシーンに？それは、あなた自身の目でしっかりと！

2023（令和5）年2月10日記